

軽井沢風越学園の「視察研修」に参加して学んだこと

K.Kさん（2024年1月に参加）

視察研修

自分の座席、チャイム、黒板、先生、テンポ、給食。。。今自分が働いている学校にあって風越学園にないものが多いことに気づき、ぼくの教育観は静かに揺さぶられ始めた。

公立小学校の教師（6年生担任）として、日々の授業をこなす中で、普段意識していないと教育の本質について改めて考えさせられる機会はなかなか持てない。しかし、視察研修という特別な時間を過ごしたことで、ぼくの中に新たな疑問と気づきが芽生えた。

視察研修のオリエンテーションで、校長の岩瀬直樹さん（ゴリさん）から聞いた、「子どもこそが作り手である」という言葉は、ぼくの心に深く刻まれた。学びの出発点は「やってみよう」という子どもたちの声から。教育の主役は私たち大人ではなく、彼ら自身なのだということが風越学園は体現していたように感じた。

「公立学校で働いているぼくが、今、本当に大切にしているものは？」

そんな問いが、風越の日常を見学したり、視察研修の中で他の参加者の人たちとワークショップをしたりしながら、頭の中にずっと聞こえていた。

「つくるえがく」の授業では、子どもたちが世界中の芸術作品が印刷されたカードを使ってかるたゲームをしているのを見た。彼らはそのカードを受け取ると、それぞれの印象を自由に書き上げ、それがゲームの読み札になっていた。スタッフは何も言わず、ただ子どもの思うように書かせている様子だった。ぼくの場合としては、大人がある程度の解説を共有し、その情報をもとに子ども達が思考を巡らせるのが一般的だった。しかし、ここではスタッフが積極的に介入しないことによって、あえて子どもたちの自主性や創造性を最大限に引き出し、その後の活動の幅を広げようとしているのではないかと思った。



（ある日の「つくるえがく」の授業の様子）

実は、このカード、昨年度の図工の授業でぼくも扱ったことがあった。その時は1枚1枚を見せて、どんな特徴があるとか、作者が誰かとかぼくが解説しちゃってたな～（汗）ぼくがこれまで行ってきた授業とは違い、子どもたちの創造性と自主性を尊重するアプローチに新たなヒントを感じた。

「スポーツ」の授業では、ドッジボールをする前のチーム分けで子どもたちが意見を交わしている様子を見た。なかなか意見がまとまらず、ドッジボールが始まらない。しかし、スタッフはただ見守っているだけのように見えた。この自由度の高い環境が、子どもたちにとってどのような意味を持っているのか、深く考えさせられた瞬間だった。

はじめに抱いた自分自身への問いかけ、「公立学校で働いているぼくが、今、本当に大切にしているものは何か？」に対する答えが少し見えてきた気がした。

それは、「子どもの本音に耳を傾けること」。風越学園での経験が、ぼくの内に秘められたこの価値観を再確認させてくれた。子どもの本音に耳を傾けられなくなる大きな原因は、いつも大人が決まった正解を引き出そうとする日常の学習方法にあるのだと思う。これによって、大人も子どもも自由な発想や本音が抑えられ、その習慣に基づいた一般的にみんなが正しいと判断される思考が優先されがちになるのではないか。その原因を断ち切る意識をもって、いかに本音を引き出せるかに挑戦していきたいと思った。

風越学園でみたような教育のあり方全てを、公立学校で実現するのは難しいかもしれない。でも、この視察研修を通して、ぼくは、新たな挑戦へ踏み出す勇気をもたらした。子どもたちの声に耳を傾け、彼らの本音を見つけ出すことは、ぼくにもできるはずだ。「やってみる」というシンプルな言葉から、子どもたちの無限の可能性と、それを引き出す教育の場の重要性を、今回改めて感じる事ができた。

その後、公立学校でやってみたこと

「卒業までにしたいことってある？」

このシンプルな問いから始まったクラス会議。

返ってきた回答は、「運動場でドッジボールやサッカーをしたい」、「教室でフルーツバスケットやトランプをしたい」、「席の配置を自分たちで決めたい」、「社会科の内容のクイズ大会をしたい」、「図書室でゆっくり本を読みたい」など。

最初にこれらの回答を見た時、

「全部昼休みとかでやろうと思えばできることじゃん！」

とってしまった。（笑）

ぼくには、子どもたちがこれまで体験したことのない計画を立てて、それをやってみるという経験を提供したいという強い思いがあった。この瞬間で重要なのは、子どもたちの本音を引き出すきっかけとなるような問いをどう投げかけるか、だった。

問い自体にすべての始まりがあった。

日常の授業で、すでに答えが定められた問いに対し、どのようにして正確な答えを導き出すか、ということに集中しすぎて、自分の本当の思いを抑え込んでしまうことがあるのではないか。このような行動が無意識のうちに習慣となり、その結果、「卒業までにしたいことってある？」と尋ねても、これまでの経験の延長線上の意見しか出なかったのではないだろうか。帰宅後、子どもたちの集まった回答を見ながらそんな感覚を覚えた。

後日、改めて問いを投げかけてみた。

「学校生活でのルールや流れを気にしなくていい。学級で過ごす中で気になっていること、卒業までに本当にやってみたいことは何か、もう一度考えてみよう」

子どもたちの中に眠る本当の願いを引き出そうとした。
この新しい問いがもたらした変化は劇的だった。

本当にしてみたいことは何か。クラスの司会者と書記を中心に議論が進み、考えがまとまった。それは、「卒業までに他学年も巻き込んで遊び、みんなで思い出をつくること」だった。

その意見にまとまった背景には、昼休みにどのクラスも学級の仲間内だけで遊んでいる現状があること。本当は他のクラスの子どもたちとも遊びたいという思いがあったのだ。

「じゃあ、具体的に何を企画する？」

次の問いをクラスで共有し、意見をまとめてみた。結果として、学校全体を舞台にした学校かくれんぼをやってみるといふ、これまで学校で実施したことのないユニークな企画に決まった。

「企画をする中で、不安なことはある？」

すると、

「他の先生や校長先生は賛成してくれかどうか心配」

という意見が出た。

その不安を解消するためにも、企画案をまとめたものを見せる必要があるのではないかと意見が出た。

これまでやったことのない活動を自分たちが企画していく中で、目的や内容が徐々に固まってきた。その過程で、クラスの一人一人が新しい挑戦に対する感覚を持ち始めたためか、自然と子どもたちが集まり、内容について相談し始める姿が見られた。

ここからの流れは、「かぜの一とをよみあう会」¹で気付いたことのように、「進める力」を身につけていきたいという思いから、子どもたちの次の一歩をただ見守ることだけにし

¹ 「かぜの一とをよみあう会」…採用情報受け取りの登録者を対象に、かぜの一との記事を読んで感じたことをシェアしたり、自身の実践をふりかえる会。2023年12月・2024年1月に実施。次回は未定。

た。そのスタンスでも、目標とやることが決まっているから、子どもたちで動き出す気がする、そんな気がした。

すると後日、ある女の子が他の先生や校長先生からも OK をもらうために、日程やルールなどがまとめられた計画案を持ってきた。

子どもたちと校長、ぼくと校長とで遊びの内容を擦り合わせながら、相談を重ねていくと、学校として実施の協力を得ることができ、無事に翌週に企画できることになった。

当日まで危険箇所の確認や、ルール説明の練習などを重ね、ついに当日を迎えた。代表が全体にルールを共有し、学校中を舞台にしたかくれんぼがスタート！



(当日の様子)

6年生が隠れ、他の学年が鬼をするというルールだった。1人でも6年生が制限時間いっぱいまで隠れけると6年生の勝利！他の学年の子どもたちもやる気に満ちて、脇目も振らず各教室や運動場など、至る所に隠れている6年生を探した。

結果は、鬼の数が圧倒的に多いということもあり、10分ほどで6年生は全滅（笑）学校かくれんぼに当てられる時間はまだあと20分もある！

6年生の間で、予定していなかった空白の時間が生まれてどうするか相談し始めた。「まだ時間があるから、次は6年生が鬼をしてみよう。」
「でも隠れたままになって、全員が最後に体育館に集合できなかつたらどうする？」
「放送で終了の合図を流したらいいんじゃないかな。これからの流れをみんなに伝えよう」

これからのルールと、最後の人数確認のための放送合図など、急遽決まったことを全体に知らせ、第2回戦が始まった。

最後は無事に終了し、他の学年の子どもたちも大満足だったようだ。

「学校かくれんぼの感想」

- ・やる前はとても不安だったけどみんなに楽しんでもらえてよかったです。
- ・みんなが終わった後、「もう1回、もう1回」と言ってくれてうれしかったです。
- ・卒業まで、あと少ししかないから、●●小学校のみんなと楽しい思い出がつくれてよかったです。
- ・自分で考えて、提案して、計画して、実行するという全部自分でしたのは初めてだったから、この経けんをいかして、中学校や高校でがんばりたいです。
- ・今日、このきかくに協力してくれた●●のみんな、岸本先生、時間をあけてくださった校長先生、楽しんでもくれた全校生徒のみんなにとっても感謝しています。
- ・協力してくれたみなさん本当にありがとうございました。

(学校かくれんぼの企画の代表を担った子どもの振り返り)

「子どもこそがつくり手である」

この企画から、子どもたち一人一人の「やってみたい」という本音が学校の中にあることが大切だと強く感じた。子どもたちが自分たちの興味や好奇心を追求することこそが、真の学びにつながる。そのためには、学校生活の日常や習慣に縛られず、大人が「本当にやりたいことは何か？」という問いを投げかけ、子どもたちの本音に耳を傾けることを忘れてはいけないと思った。このような問いかけは、唯一の正解に留まらない、子どもたち自身の深い思考や感情を引き出す力がある。立ち止まって、彼ら自身が真に望むことを自問自答させること、それが大人の大切な役割なのではないだろうか。

今後は、このような教育のアプローチを実際の学級経営に活かす実践例をどんどん学んでいきたい。子どもたちが自分の学びの主体となれるような教育環境を整えることが、これからのぼくの課題。この挑戦を通して、子どもたち一人ひとりが自らの可能性を最大限に発揮できる場をつくっていきたいと思う。

彼らは先日卒業を迎えた。最後に担任のぼくから、「みんなが学校のつくり手だから、やってみたい気持ちを大切に」というメッセージを残して一人一人を送り出すことができた。